

授業科目	特別研究		担当教員	古賀 靖之	
展開方法	演習	単位数	8単位 必修	開設時期	1年～2年次(通年)
【授業目標】					
<p>臨床心理学という学問的視点から、人間の心理発達や特性あるいは病理性さらに心理援助に関する知見と実践を基盤に、修士論文作成を目指す。実際的には、論文テーマを決定した後に、国内外の過去の先行研究から最近の研究までをレビューし、論文テーマへの問題意識の明確化、研究計画の立案と検討、論文構成の吟味、実態調査等の実施、結果の整理と分析、臨床心理学の立場からの考察を行うことで、研究論文作成における基本的な事柄の修得を図りながら、修士論文指導を行う。</p>					
【授業方法】					
<p>文献検索・文献抄読、文献レビューの発表と討議、研究計画の検討、デザイン発表会での発表、実態調査等の実施、結果の整理と分析、中間発表会での発表、考察を加えて修士論文作成、修士論文に関する口頭試問と最終発表会での発表などを通して学ぶ。</p>					
【授業計画】					
(1年次)					
<p>臨床心理学の立場から、人間の心理発達や特性あるいは病理性さらに心理援助に関する知見と実践を基盤として、修士論文テーマに関係する主要な先行研究から最近の研究までをレビューし、研究テーマへの問題意識の明確化、研究対象や方法論の検討などを行う。</p>					
(2年次)					
<p>1年次の学習指導を基盤として、デザイン発表会と中間発表会および指導教員を含めた集団ゼミによって、必要に応じて研究計画の再検討と修正を行ったうえで、研究の実施およびデータの収集を行う。次に、得られた研究データの整理・分析を行い、論文構成を吟味するとともに修士論文として適切なまとめ方や論文の表現方法について指導する。また、研究論文作成に伴う倫理的配慮についての十分に指導を行う。</p>					
【評価方法】					
<p>完成した論文について、表題、研究目的、研究方法を適切に述べられているか、結果と考察に新しい知見が含まれ、論理に矛盾がないか等を評価する。</p>					
【教科書・参考書】					
<p>特に定めないが、適宜に指示を行う。</p>					
【学生に期待すること】					
<p>高い研究意欲を持ち、臨床心理学の専門家として責任ある研究を実施することを望みます。 各自の研究進行状況を確認し、問題点を明確にしておくこと。また、授業において、受けた指導内容を確認し、鋭意新たな文献検索および資料収集を行うこと。</p>					

授業科目	特別研究		担当教員	長野 恵子	
展開方法	演習	単位数	8単位	開設時期	1～2 通年
【授業目標】					
<p>自らの問題意識に基づき国内外の先行研究をレビューし、問題と目的の明確化、研究計画の立案、調査等の実施と結果分析、考察をもとに、臨床心理学的研究としての修士論文を作成する。高齢者および高齢者を支える人々の心理的支援に関するもの、ストレスマネジメント、言葉だけでなく動作によるアプローチに関わる分野等を中心に、調査的研究もしくは実践現場での経験がある場合には実践的介入研究を行い論文を執筆する。修士論文作成を通して心理臨床実践家に必須とされる研究能力を培い、研究成果や作成プロセスの中で修得した力量が将来の実践に還元されることを目指す。</p>					
【授業方法】					
<p>文献検索・文献抄読、文献レビューの報告と討議、研究テーマの絞り込み、研究計画の検討、研究の実施、研究経過の報告と討論・助言、結果の検討と考察、各種学会発表の検討などを通して学ぶ。</p>					
【授業計画】					
<p>1年次： 研究テーマをめぐる問題意識の明確化を図る。そのために、国内外の主要な研究から最新の研究まで先行文献のレビューを行うことから始める。報告や討論を通じて、各自の研究課題を意識化し明確にする。研究対象を焦点化しテーマを定め、研究の方法論を検討する。決定したテーマに従い予備的調査、実態調査、先行的な臨床実践等を実施し、発表と討議を通じて研究計画を再吟味し、2年次以降の本実施への準備をする。 (1年次の11月に行われる第1回中間発表会に向け、研究テーマの決定を目指す)</p> <p>2年次： 1年次における予備的調査、先行的な臨床実践を分析し、中間発表や教員との討議を繰り返すなかで、本研究実施へ向けて倫理的配慮の観点を含めて研究計画の再検討を行い、研究の実施およびデータ収集を行う。結果の分析、考察に対する討議と助言を重ねていく。さらに、論文構成を吟味するとともに、論文としての適切なまとめ方、論文表現のあり方について指導する。</p>					
【評価方法】					
<p>完成した論文について表題（テーマ）、研究目的、研究方法、研究経過、結果、考察が適切に述べられているか、結果と考察に新しい知見が含まれ、論理に矛盾や飛躍がないか等を評価する。</p>					
【教科書・参考書】					
<p>教科書 特に定めないが、適宜指示する。</p>					
【学生に期待すること】					
<p>各自が能動的に研究活動に向かい、倫理面に十分配慮した責任ある研究を実施すること。自分自身との向き合い方を含め、将来の心理臨床に還元できる視点が持てるように期待する。</p>					

授業科目	特別研究		担当教員	西村 喜文	
展開方法	演習	単位数	8単位	開設時期	1～2 通年
【授業目標】					
<p>修士論文のテーマと内容が臨床心理学に関するものであることとし、心理臨床的支援に役立つ修士論文作成を目指す。このことは、さまざまな領域での実践が可能であり心理臨床実践フィールドに還元されるものと思われる。特に、本授業においては、心理療法においても重要な役割を担う「ことばとイメージ」について理解を深め、イメージそのものが治療媒体となる表現療法（箱庭療法、コラージュ療法、絵画療法等）などの非言語的技法についての研究を大きな柱としたい。研究としては、幼児から高齢者までを対象に、非言語的技法を用いた心理臨床的支援のあり方について論考したい。</p> <p>まず、研究に対する問題意識を明確にし、研究計画の立案、文献レビュー、調査等の実施、論文作成と各研究テーマにそった指導を展開していく。</p>					
【授業方法】					
<p>文献検索・文献抄読、文献レビューの発表と討議、研究計画の検討、各種学会発表の検討などを通して学ぶ。</p>					
【授業計画】					
<p>1年次 学生自身の研究（修士論文）に対する問題意識を明確にする。 先行研究、文献等を通して研究課題を整理する。基本的には5W1H〈対象者（誰が）、場所（いつ）、どこで（場所）、何を（問題点）、なぜ（目的、理由）、どのように（方法）〉に基づき研究内容を出来るだけ深く掘り下げ整理していく。その中で研究課題を明確にし論文作成の基盤を作る。 （1年次の11月に行われる第1回中間発表会に向け、研究テーマの決定をめざす）</p> <p>2年次 1年次の学修を基盤として、教員の指導のもと調査研究、文献研究を進めていく。また、他のゼミ生徒との討議を通じて研究を深め、データ分析、その解釈、考察を進めていく。 得られた研究データを検討しながら、論文構成を行い学術的論文になるよう指導を行う。 また、研究に伴う倫理的配慮についても十分検討する。</p>					
【評価方法】					
<p>完成した論文について、表題、研究目的、研究方法が適切に述べられているか、結果と考察に新しい知見が含まれ、論理に矛盾や飛躍がないか等を評価する。</p>					
【教科書・参考書】					
<p>特に定めないが、適宜指示する。</p>					
【学生に期待すること】					
<p>心理臨床の実践力と高い研究意欲を持つ学生を期待したい。倫理問題も踏まえ、自分の研究には責任をもって臨んでもらいたい。また、学会発表など、自分の研究成果を発表し評価をもらおうという謙虚な姿勢も学んでほしいと願っている。</p>					

授業科目	特別研究		担当教員	平川 忠敏	
展開方法	演習	単位数	8単位	開設時期	1～2 通年
【授業目標】					
<p>臨床心理学では心理査定・心理療法・環境介入と研究が4本柱と言われている。本演習ではそのなかの環境介入についてコミュニティ心理学の立場から理論、歴史、方法論を理解し実践できるようになることを目的として、修士論文の作成を目指す。具体的には、クライアント自身へのアプローチと同時にその周りの、家族、グループ、地域社会などへのアプローチのプログラムを開発して、そのプログラムの評価までを行う。</p>					
【授業方法】					
<p>文献検索、文献抄読、文献レビューの発表と討議、研究デザインの検討、各種学会発表の検討などを通して学ぶ。</p>					
【授業計画】					
<p>(一年次)</p> <p>発達障害、知的障害、身体的障害、神経症、精神病など心理的要因の絡むさまざまな症状をもつクライアントに対して心理査定を行い続いて心理療法を実施できるようになるために、心理相談や小中学校での教育相談による実習を重ねる。</p> <p>(二年次)</p> <p>クライアントとだけでなくその周りの家族や担任や組織の関係者、環境要因に対する治療教育プログラムを立案してそれを実践する。その結果どのような効果をもたらしたかのプログラム評価をすることで大学院生ができるようにする。1年次のクライアント個人への査定と関わり、2年次の環境への介入方法の立案と結果のフィードバックを通して、個人もその周りの環境も変えていくことを身につけ、それをもって修士論文としていくように指導する。</p>					
【評価方法】					
<p>完成した修士論文が表題、研究目的、方法が適切に述べられているか、結果と考察に新しい知見が含まれているか、踏襲可能な内容であるかなどが評価される</p>					
【教科書・参考書】					
<p>教科書 特に定めないが、適宜支持する</p> <p>参考書 山本和郎他編著 「臨床・コミュニティ心理学」 ミネルヴァ書房 松原達也他編 「心のケアのためのカウンセリング大事典」 培風館</p>					
【学生に期待すること】					
<p>軽快なフットワークと綿密なネットワークと少々のヘッドワークでもって自立した研究者を目指し、社会に役立つ枠割を果たせるように希望する。予習は参考書を読んでもらうこと、復習は講義の内容を機会をとらえて実践すること。</p>					

授業科目	特別研究		担当教員	眞田 英進	
展開方法	演習	単位数	8単位 必須	開設時期	1～2 通年
【授業目標】					
<p>障害児（者）の心理や行動についての解明・理解、困難性への対処支援等に関する知見を基礎に、また、心理臨床的支援実践の知見を基礎にして、修士論文作成を目指す。以上の知見は医療・教育・福祉の領域への従事者には必須であることは言を待たない。特に、教育領域において、通常（普通）教育場面での発達障害児に対するインクルージョン支援体制整備の推進は喫緊の課題である。本授業に関連する障害種区分は感覚・運動・知的・情動の諸障害、LD・ADHD、自閉症スペクトラム等の発達障害と多岐に渡る。これらの障害を研究対象とする調査研究、心理や行動に関する分析的研究、個人あるいは集団を対象とする心理臨床的支援研究等、内外の最新先行研究を検索・レビューすることから始める。問題意識を明確化し、研究主題を掲げ、研究計画立案と実施、結果と考察、結論、に至る論文作成の過程全般に渡って指導する。本授業は、研究成果や研究者（院生）の力量が心理臨床実践フィールドに将来的に還元され得る方向性を重視する。</p>					
【授業方法】					
<p>文献検索・文献抄読、文献レビューによる報告と討議、研究テーマの絞り込み、先行研究検索、研究計画の検討、研究の実施、研究経過の報告と討論・助言、結果の検討と考察、各種学会発表の検討などを通して学ぶ。</p>					
【授業計画】					
<p>1年次： 医療・教育・福祉領域における障害児（者）の心理・行動分析、障害児（者）を取り巻く課題、障害児（者）の支援体制、障害児（者）に対する心理治療的研究、などに関する国内外の主要な研究から最新の研究までレビューを行うことから始める。報告や討論を通じて、各自の研究課題を意識化し明確にする。研究対象に焦点化しテーマを定め、研究の方法論を検討する。秋期初頭を目処に、テーマ決定を目指す。決定したテーマに従い予備的調査、あるいは先行的心理臨床的実践を開始し、着手状況を検討指導する。</p> <p>2年次： 1年次の予備的調査、先行的な臨床実践を基礎に、教員と討議を繰り返す。予備的調査の計画の修正や結果に対する再吟味、先行的臨床実践について倫理的配慮の観点を含めて再検討を行う。以上の討議を経て研究実践を本格化する。調査経過と結果の検討、あるいは心理臨床実践経過報告に対する討議と助言を繰り返す。さらに、修士論文に相応するための論文構成、論文表現、研究結果による到達点と課題の明確化が可能となるように指導する。さらに望ましくは、研究の成果を学会発表したり、学術雑誌への論文投稿を推奨し、指導する。</p>					
【評価方法】					
<p>完成した論文について表題（テーマ）、研究目的、研究方法、研究経過、結果、考察が適切に述べられているか、結果と考察に新しい知見が含まれ、論理に矛盾や飛躍がないか等を評価する。</p>					
【教科書・参考書】					
<p>教科書 特に定めないが、適宜指示する。</p>					
【学生に期待すること】					
<p>自立した研究者・心理臨床実践者を目指し、各自が積極的で高い研究意欲をもち、責任ある研究を実施すること。</p> <p>準備学習（予習・復習）に関する指示：各自の研究進行状況での疑問点を明確にする（予習）。毎回の授業において受けた指導助言の事項を確認し、鋭意新たな文献検索実施や資料収集の手掛かりを明らかにすること（復習）。</p>					

授業科目	特別研究		担当教員	池田 久剛	
展開方法	演習	単位数	8単位	開設時期	1～2 通年
【授業目標】					
<p>臨床心理的支援に還元できる可能性があり、かつ客観的に、第三者に対して説得力のある研究・論文を目指す。リサーチ研究が望ましいが、調査のための調査ではなく、臨床心理学的な視点（理論）・哲学に裏打ちされた研究であることが重要である。テーマは各人の問題意識を大切にしたいと考えるが、研究者自身の自我や葛藤に根ざした問題意識が重ね合わされることが少なくなく、論文作成を通して自己との対話を深め、自分の中にある潜在的可能性について思考・探求することも期待したい。</p>					
【授業方法】					
<p>文献検索・文献抄読、文献レビューの発表と討議、研究計画の検討、各種学会発表の検討などを通して学ぶ。</p>					
【授業計画】					
<p>1年次 学生自身の研究（修士論文）に対する興味・関心のありかを明確にする。 その過程では、先行研究の確認や、どの様な理論的背景が提唱されているのかの確認作業を丁寧に行う。 その上で、研究の意図、なぜそのことを研究したいと考えるようになったのかを明確にし、修士論文作成を継続できるような土台・基礎を作る。 （1年次の11月に行われる第1回中間発表会に向け、研究テーマの決定をめざす）</p> <p>2年次 1年次の学習指導を基盤として、教員や他ゼミ生との討議を通じて、データ分析、その解釈、考察を進めていく。 得られた研究データを検討し、論文構成を吟味すると共に、修士論文として適切なまとめ方や、論文の表現方法について指導する。また、研究に伴う倫理的配慮についても十分検討する。</p>					
【評価方法】					
<p>完成した論文について、表題、研究目的、研究方法が適切に述べられているか、結果と考察に新しい知見が含まれ、論理に矛盾や飛躍がないか等を評価する。</p>					
【教科書・参考書】					
<p>特に定めませんが、適宜指示する。</p>					
【学生に期待すること】					
<p>高い研究意欲を持ち、責任ある研究を実施し、学会発表などを通して研究結果を広く発表する機会を求めて欲しいと思います。研究の動機付けは自分自身に端を発する課題であっても、そのテーマを臨床に還元し、重ね合わせて考えることができる思考性を持ち、研究において自分自身と向き合うことを通して、他者（クライアント）に対する理解を深めるような志を持つよう望みます。 準備学習として、自分が行いたい研究のレビューは必須であり、また授業で行われたディスカッションに対して事後各自整理をすること。</p>					